第６回区政改革懇談会・議事要旨

日時	第６回　平成２０年７月１５日（火）、１９：００～２１：００
会場	サンパール荒川　高砂・羽衣

議事要旨

開会

１．座長あいさつ

・ 第５回議事要旨について、委員の皆様からのご意見が特になかったため、確定する。

・ 前回から子育てをテーマに、グループごとに討議を進めており、本日は 2 時間のうちの前半は前回に引き続きグループ討議、後半はグループごとに発表を行う。

○ 事務局から資料説明

・ 前回にグループからご希望のあった「荒川区子育て支援需要調査報告書（概要）」資料を配付した。

・ 今回も、子育てに関する所管の職員が出席しているので、質問があれば随時、進行役が呼んでいただければお答えする。

・ また、次回からは防犯をテーマとするため、平成 20 年度当初予算の主な施策の一覧を配布した。

・ また、先日、委員から「時間の制約がある中で、当日の討議で言い足りなかった事や感想、疑問点などを用紙に記載してはどうか」といったご提案を頂いたため、「懇談会意見用紙」を作成した。お帰りの際、あるいは後日郵送やファックスなどで、ご意見等を送ってほしい。

２．グループ討議

・ 【グループ討議の結果まとめ】別紙参照

３．子育て分野のグループ発表

（１）各グループの発表

○ 南千住グループの発表

・ 南千住グループでは、地域での子育て仲介の制度やボランティア登録促進の提案に絞って議論した。通学路の交通安全や交通整理などのボランティアをやりたいと思っている人は多い。ボランティアを単に登録するのではなく、研修を受けさせるなどして資格を与え、しっかりしたボランティアを育てる。

・ 商店街の空き店舗を活用して、子育て中の人や高齢者のコミュニティサロンとして利用したい。高齢者が子育ての手伝いをできたり、子どもが高齢者の話し相手になったりする。

・ 商店街の空き店舗のいいところは買い物ついでに立ち寄れ、気軽に相談できる点である。商店街の活性化にも役立つ。

○ 他グループの委員からの質問

・ 商店街の空き店舗には、コミュニティサロンとして使えそうな物件が多くあるのか？また、活用のニーズの状況についてはどうか？

議事要旨つづき

○ 南千住グループの回答

・ 空き店舗も活用ニーズも増えていると認識している。ただ、区からの家賃補助など財政面の支援が必要だと思う。

○ 荒川グループの発表

・ 荒川グループでは、地域コミュニティの基本は町会だと考えて町会の議論から始めた。町会は行政からの情報伝達ルートとしての役割が大きいが、それが今、人材不足から機能していないのではないか。
・ また、町会に依存しなくても生活できる現状もある。若い世代は、ひろば館や保育園、小学校のクラスなど、子どもを介したコミュニティによって情報共有を図っていて、町会離れが進んでいる。
・ ただ、このような横のつながりによるコミュニティは地域を包括的にカバーしていないので、やはり町会の役割が重要ではないか。
・ 区が町会連合会に情報を流してもそれが各町会に伝わっていかない。連合会の組織の改善を提案したい。そのためには区の意識改革も必要だ。マンションの管理組合への働きかけも足りないのではないか。
・ 一方で、ひろば館などを核にした小さなネットワークもある。そこでは子ども達をリーダーとして育て、地域にかかわらせることが重要だ。学校の校庭開放のリーダーを中学生が担うなど、縦の結びつきをつくることを提案する。

○ 町屋グループの発表

・ 地域の情報を分かりやすく提供する場づくりを提案する。コンビニやスーパーを利用してボランティアを募集するなど、生活に身近な場所での情報提供を行う。
・ また、幼稚園、保育園、小学校施設の有効利用や、孤立しがちな外国人グループの支援などを考えたい。
・ 次に、子どもが屋外で遊ぶ場が減っていることから、スポーツチームの活性化を働き掛けたり、親も子どもの遊びに参加できるような仕掛けができないか。
・ また、ボール遊びを禁止している公園もあるが、子どもが自由で安全に遊びやすいような公園を整備したい。地域で管理する体制があればできるのではないか。

○ 尾久グループの発表

・ 尾久グループでは、「地域の拠点づくり」と「子育て支援」の二つの切り口を見つけた。しかし、子育てだけでなく、地域の様々な問題に関連してくると考えて、地域の拠点づくりに焦点をあてることにした。
・ 尾久地域には核になるものがなにもない。近くの保育園に入れない、小学生中学生が集まって勉強する場がない、箱物はあっても連携ができていない、図書館も西尾久にしかなく、子どもが通えない。
・ そのため行政任せではなく、地域自ら拠点づくりをしたい。そして、世界に情報を発信する拠点づくりを行いたい。区内の大学生など様々な人材を活用して、荒川の、尾久のローカルな情報を世界に向けて発信する。
・ この構想を具体化するには、もっと多くの地域の人々の声を聞きたい。

議事要旨つづき

○ 日暮里グループの発表

・ 日暮里グループでは、「コミュニティとは何か」を掘り下げて議論した。子どもをどう育てるか、町会とのかかわり、学校とのかかわりについて話し合った。

・ 「子育てとコミュニティ」というテーマを考えたとき、町会は子育てに関わっていないと言える。子育て世代は、他のネットワークを使って子育てを支えあっている。

・ 町会とは、昔から地域に根付いたもの、地域を守るものであって、何ができるというものではないのではないか。いうなれば、土台のようなものだ。その上に、いろいろなネットワークがある、というのが理想である。関連して、学校の自由選択制の利点と課題についても今後議論したい。

・ また、コミュニティの大切さは災害時により実感できると思う。町会や隣近所のコミュニティを構築するためにはどうすればいいか。その際の行政の支援はどうあるべきか、といったテーマについて議論したい。

（２）意見交換

○ 南千住グループの委員から

・ 「町会と子どものかかわり」について：祭りに集まってくる子ども達は大人とも顔見知りになる。また、ラジオ体操もやっている地域では、町会と子ども達の結びつきがある。

・ 子ども１１０番の登録者を増やしていくべきだと考える。

○ 荒川グループの委員から

・ 発表者が考えをまとめる時間をつくるため、グループ発表は、討議の後半ではなく、次回懇談会の前半にするといい。

○ 町屋グループの委員から

・ 公園について：子どもがどんな公園をほしがっているのだろうか。子どもが遊びたくなる公園が荒川区には少ない。世田谷区の羽根木公園のような、子どもの冒険心を育て、また、下の世代に引き継がれていくような仕組みを作りたい。

・ 子どもにアンケートをとって一緒につくる、子どもリーダーを育てるなど、「子どもが参加する公園づくり」の種をまいてほしい。

○ 尾久グループの委員から

・ 拠点づくりについて：ふれあい館の整備が進んでおり、荒川山吹ふれあい館は理想的に活用されているが、他はどうか。貸し館機能はあるが、利用者同士の連携が進んでいない。

・ 今後、世代間交流も含めたネットワークづくりのキーパーソンが重要になる。利害がなく、熱意があり、冷静な人であることが重要である。

・ そして地域住民が、施設の運営者をあらかじめしっかり選んでおきたい。建設段階から地域の人材が参加することが重要である。

議事要旨つづき

○ 尾久グループの委員から

・ 子育てニーズについて：一番の子育てニーズとは、子どもが集まり遊べることだ。子ども達が自由に遊べ、それを親が遠くから見守るような環境が欲しい。

○ 日暮里グループの委員から

・ 「今、子育てにとって何が必要か」ではなく、子育て、防犯、福祉というテーマは切り口であり、あくまでも「コミュニティ力向上のために何をするか」にこだわって議論した。

・ 今、子ども達が地域から切り離されていると感じる。その中で町会の役割はなにか。親や子ども達には町会に替わるコミュニティがあり、情報共有をしている。その中で町会、地域コミュニティが果たす役割は、「情報共有をいかにできるか」だと考えた。いろいろなコミュニティが複層的にあるにもかかわらず、それぞれの持つ情報が共有されていない。この課題について、子育てを切り口として考えたらどうか。

○ 三ツ木副区長からの意見

・ 庁内で子育て施策について議論すると、施設配置の話になりがちだが、この懇談会ではより広い視野からの議論がされており新鮮に感じた。

・ 空き店舗の活用については、現在、ふるさと物産館での店舗の賃料補助、南千住図書サービスステーションの空き店舗活用などの例がある。大きな拠点施設だけでなく、地域の点在する既存の施設の有効利用は区としても課題だと考えている。

・ 町会と若い世代の結びつきについては、荒川グループで、町会の重要性についてこだわった議論がされていた。子育てと町会がどうかかわっていくのか、良いところを活かし、不足をどう補完していくかという視点で提言を頂きたい。

・ 子どもが行きたくなる公園づくりについては、キャッチボールのできる公園が区内に少なく、区としても課題と考えていた。ニーズを再認識した。

・ 情報発信する拠点づくりについては、是非より具体化して議論して頂きたい。特に、ふれあい館との違いについてぜひ聞かせて頂きたい。

・ コミュニティと情報共有については、住民は、関心のある情報は受け止め、関心がなければ聞き流してしまうので、多様なニーズを持つ全ての人に満足してもらうことは大変である。「区報きっず」は、ターゲットを絞った一つの手法である。子育てニーズは時代や社会背景によって変化し、固定的でないので難しい点がある。

・ 全体的に所管の課を超えた広い視野での議論がされており、有意義だった。

４．次回の懇談会について

○ 座長

・ 次回は、防犯をテーマに地域別グループで討議する。

・ 日程は、９月を予定している。詳細は改めて事務局から連絡する。

以上

第6回　区政改革懇談会
グループ討議の結果まとめ

平成20年7月15日（火）午後7時～9時　@サンパール荒川　高砂・羽衣

＜南千住グループ＞

1. 地域での大人の子どもとのかかわり

【防犯活動への関わり】

- 地域の人が個人的に気楽にかかわれないのは、防犯の観点やプライバシーの問題に理由がある。
- 一般の人が気楽にかかわれるものとしては、子ども 110 番制度がある。登録をすれば関わりを持てることはできるし、そうした制度をつくるとよい。
- 子どもの登下校時の交通安全に気楽にかかわりを持てるとよい。

【町会活動をきっかけにした子育てへの関わり】

- 町会に加入し、町会の活動として参加するのであれば、地域の子どもともかかわりは持てる。積極的に町会活動に参加するようにしたらよい。
- お祭りやラジオ体操などに参加すれば子どもとのかかわりを持てる。掲示板などにも色々な子どもの行事が記載されている。

2. 子どもを見守るエリアマネージメント的な制度

【登下校時の交通安全の活動】

- 子どもの登下校時の交通安全の活動を無償の活動とし、だれもが参加しやすくする。
- ただし、参加する人には行政が研修を行う。研修を受けた人に対してはその証となるようなバッチや証書などを発行して、活動時には、そのバッチ等を身に付けるようにする。

【エリアマネージメントの制度の創設】

- 研修を受け登録をした人が地域で活動をする、エリアマネージメント的な制度を創設する。PTA の活動だけでは子どもをサポートできないので、エリアマネージメントの活動が必要である。
- 登録したエリアマネージャーが、子ども家庭支援センターでも活動できるようにする。
- 子ども家庭支援センターでエリアマネージャーが多く登録するように促進を図る。
- 特に、汐入地域にエリアマネージャーを配置する。

3. 空き店舗を活用した子育てコミュニティサロン

【商店街の活性化と子育てコミュニティ】

- 空き店舗を活用し子育てコミュニティサロン的な施設を設ける。これは、商店街の活性化にもつながる。例えば、母親が子どもをそこに預けて買い物をする。買い物をしながら母親同士の交流が持てる。高齢者も、そこを基点に買い物が出来るようにすると、もっと交流が広がる。

【子育てコミュニティサロンへのエリアマネージャーの配置を】

- 子育てコミュニティサロンに保育士またはエリアマネージャーを配置する。
- 空き店舗の家賃は行政が一部負担する。
- 飲食喫茶ができればなお良い。難しければせめて自動販売機を置く。

＜荒川グループ＞

1．若い世代･子どもの地域とのつながり

【マンション世帯の町会離れ】

・ 区は、条例を生かして、マンション管理組合に町会への加入をもっと働き掛けるべきだ。

【お祭りをきっかけにしたつながり】

・ お祭りは一時的なつながりしか生まれない、という意見もあったが、役員を持ち回り制にすると世代間の引継ぎが上手くいく。
・ ただ、それもケースによって上手くいく例とそうでない例がある。

【若い世代のコミュニティ】

・ 生活の中で町会がなくても事足りてしまう。親が働いていると、なおさらかかわりを持たなくなる。
・ 荒川区はゴミの分別の区分が少ないので町会に頼らなくてすんでいる。
・ ひろば館や学校などから子どもが防犯や地域の情報を持って帰ってくるので、親は子どものネットワークを介して情報を得ている。
・ 保育園や学校の親同士はつながりがあり、情報を共有している。しかし、このコミュニティは地域全体への広がりを持っていない。

2. 子育て世代のコミュニティと地域のつながり

【子どもを介したコミュニティと地域のつながりづくり】

・ ひろば館に集まる子どもや親の結びつきはあるが、地域全体の子どもを対象にするには規模が小さいのではないか。
・ 地域全体を対象にするなら学校を核にするといい。
・ ひろば館などを核にしたコミュニティは、地域全体への広がりや町会との連携につながっていっていない。
・ ひろば館で子どもが合宿をする際に、地域のお年寄りが昔話や戦争の話を聞かせるような取組をやってみたい。

3. 町会を介した区政情報の提供

【町会は、区の情報を提供するルート】

・ 区が情報提供の窓口にしているのは連合町会だけだ。しかし、各連合会からその会議に出席する人数が少なすぎるせいか、町会まで情報が浸透しない。
・ 区はさまざまな事業を行っていて、それをもっと活用し、評価、改善していくために、区政情報をより地域に浸透させたい。そのためには、各連合会から３名ずつ、そのうち１名は婦人部会とするなど、情報伝達の方法を改善すべきである。
・ これは、子育てだけでなく、他のテーマにも共通する課題である。

＜町屋グループ＞

1. 子どもの遊びを経験する場の不足の解消に向けた取組

【家庭における親の役割】

・ 野球チームやサッカーチーム、その他の遊び等に参加するよう、まず親が声を掛けることが重要ではないか。
・ 親が子どもの遊びに参加するよう導くだけでなく、スポーツ等に一緒に参加すること

も大切である。野球好きの親の子は野球を始めることが多い。

【子どもの遊びに合わせた場所の整備】

・ 子育て調査では、子どもの平日の過ごし方として、室内遊びが７４％、体を動かす遊びが３２％という結果が出ている。また、子どもが利用する施設への希望として、公立の施設を増やしてほしいが５割を占め、そのうち、６割が子どもが屋外で遊べる施設の設置を望んでいるが、実際は小中学校の校庭など屋外で遊べる施設は既にあり、利用されていないというのが実態である。
・ 路上のボール遊びが危険と言われているが、近くにボール遊びできる公園がないことも多く、子どもの遊びに合わせた公園づくりが求められる。
・ 地域別のスポーツ施設の充実や学校の利用など、子どもの遊びに合った施設づくりが求められる。

【公園での大人の見守り】

・ 公園で子どもだけで遊んでいる時に事故が発生した場合の取り扱いを、日頃から研究しておく必要がある。実際には、公園に子どもの遊びを見守る人が必要である。
・ 子どもの世話を誰に求めるのか。PTA か、町会か。難しいのではないか。
・ 親は、子どもが通う学校の行事等に参加するのに精一杯で、地域社会に参加する余裕がない場合が多い。フレックスで働ける環境ができれば地域活動にも参加できるかも知れない。
・ 世田谷の羽根木プレイパークのような、大人が常駐し、子どもが思う存分遊べる公園などの設置を検討してみてはどうか。

2. 子育て中の親に対する支援

【わかりやすい情報提供】

・ 町屋地区や周辺部のコンビニやスーパーなどに、町屋地区に限定した子育て支援サービスニュースや資源をまとめたチラシやパンフを設置、又は配布協力してもらうようにし、子育て情報になるべく触れやすい環境をつくったらどうか。

【地域の子育てに関する中核施設の設置】

・ 子どもの病気や面倒について、経験者の話が聞くことができるサポートステーションをつくったらどうか。
・ ふれあい館などの公共施設で、ボランティアが協力し子育て支援センター的な機能を持たせることはできないだろうか。

【親がいなくても子どもが楽しめる場づくり】

・ 子どもの学校が休みでも、親は忙しい場合が多い。親が居なくても参加できる行事を開催したらどうか。
・ 幼稚園生、小学生、中学生が、少し年上の世代の高校生や大学生と交流することができる場があるとよい。地区内に高校はないが大学がある。町内会等が交流のつなぎ役となれるとよい。

【外国人居住者との交流の場づくり】

・ 外国人居住者との交流ができるとよい。大人が日本語を話せなくても、子どもはたいていバイリンガルなので、仲介できるだろう。

＜尾久グループ＞

1. 拠点づくりをきっかけに子育てを含めた多様な活動の展開

【ふれあい館の建設への参加】

- 尾久地域には総合型の地域の施設がない。現在ある施設はひろば館やアクト 21（男女平等推進センター）など縦割りの施設ばかりで、広さも十分でなく、子どもからお年寄りまですべての人が集う施設になっていない。
- 荒川区内で１９館の整備を目指しているふれあい館は総合型の地域施設であるが、西尾久にあるため、東尾久の人は利用しにくい。
- ふれあい館の整備は 300 坪の土地が必要であるが、東尾久に候補地があって区はそこに建設をすることを検討中であると聞いた。このふれあい館づくりをきっかけとして多様な活動が展開されるように取り組んではどうか。
- 新しいふれあい館は、検討するときから運営協議会を設立して建物の検討を進めるとよい。
- 既存の施設も縦割りを解消して、子どもから大人まで幅広く利用する施設とすれば、子どもの健全育成のためになる。

【拠点づくりをコミュニティづくりにつなげることが必要】

- 活動拠点の運営は、利用者がばらばらに利用するだけの拠点にならないように工夫する必要がある。
- 現在の拠点は箱物のみでコミュニティの創出、人材育成につながっていない。

【キーパーソンを見つけることが必要】

- そのためにはリーダーが必要となる。北海道のよさこい祭りのリーダーなど他の事例から学べることがあるのではないか。
- キーパーソンは既存団体の長ではない新しい人材だと思う。キーパーソンをどのように発見し、どのように地域とつながるかを考える必要がある。

【荒川山吹ふれあい館に学ぶ】

- 荒川山吹ふれあい館は平成 17 年に完成した施設で、これまでの他のふれあい館整備で蓄積されたノウハウを活用して使いやすい施設となっている。建設時の市民参加は行っていない。
- 高齢者クラブが指定管理者となって運営している。独自のＨＰがあり、充実した運営をしている。
- 単なる貸館になっておらず、キッズルームやキッチンがあり、飲食可となっている。チューリップ畑がとても美しく、十分に手入れされているのだと思う。拠点づくりの参考になる。

【外国人をもてなす地域づくり】

- 新しい拠点では、姉妹都市であるドイツの都市からの訪問客が宿泊できるような施設にしてはどうか。地域にある東京外国語大学国際交流館と連携して学生がもてなすとよい。
- 地域の生の暮らしぶりを見てもらいつつ、国際交流をすることを通じて地域づくりが進むのではないか。

2. 子どもが自主的に活動できる環境

【子育て中の人のニーズの把握】

- 拠点づくりは子育て中の人のニーズに合っているのか疑問がある。
- 子どもだけで遊ぶ環境、外遊びできる環境をつくり、大人は何かあったときにフォローできる体制とすることが必要だと思う。大人がなんでもお膳立てしてしまうのは、

子どもにとっていいことではない。
・ 最近、街の整備が進んでしまい、子どもが外に行っても遊ぶ場がないと言う。昔の原っぱの方が遊びやすかったと言っている。ここに何か考える必要がある点があるのではないか。
・ 具体的なアイディアについては、今後考えて行きたい。

＜日暮里グループ＞

1. 子育てをテーマにしたコミュニティ

【多様なコミュニティの捉え方】

・ コミュニティは、目的によっていろいろな形がある。
・ コミュニティというと住んでいる地域を想像するが、地域の枠にとらわれるのではなく、もっと広い範囲で考えるべきである。
・ 人と人のかかわりの範囲がコミュニティになるのでは。
・ 「子育てを地域で」というのは理想だが、実際の関係づくりは難しい。
・ お母さんたちは地域での子育てコミュニティを必要としていないのではないか。同じ家族でも、祖父母世代と今の世代では意見が食い違うことがある。
・ 今の家庭は子育てに必要な組織（ＰＴＡ、生協など）を自由に選択できる。親が必要だと思うものを選択してつくられるコミュニティが子育ての上では重要ではないか。

【コミュニティの中の町会の役割】

・ 町会だけでは、今の細かなニーズに応えきれない。全てのコミュニティの支援を町会が担うことはできない。
・ 今は目的別のコミュニティがたくさんあるので普段の生活の中では町会がなくても困らない。
・ 今後のコミュニティの中で大事なことは、地域の中の相互の情報交換である。町会をはじめコミュニティで活動する人たちの情報をどう広げるか、どう使えるかが今後の課題である。
・ 町会が長い歴史・伝統・文化の上に成り立っていることを忘れてはいけない。子どもたちは、祭りなどの町会行事に参加することで地域とかかわりをもっていくものである。
・ 町会にとって子育てはメインの課題ではない。見守りなど最低限の支援でよいと思う。
・ 町会は防災などいざというときに力を発揮する組織であるべきであり、来るものは拒まず、寛容な組織であるべきである。コミュニティの底辺の土台となる組織ではないか。
・ 町会に入らない人には厳しくすべきではないか。普段、町会活動に参加しないで、いざというときに支援だけ受けるというのは問題である。町会のサービスを期待するなら、町会に入るべきである。

以上